# ビルマ漆を用いる在来漆器産業の変容

平成 20 年入学
カメルーン・フィールドスクール参加
調査国：タイおよびミャンマー
田中孝典

キーワード：ビルマウルシ、漆器、在来技術、籃胎、蒟醤

## 自分の研究テーマについて

タイおよびミャンマーには、*Melanorrhoea usitata* というウルシ科の樹木（ビルマウルシ）から採取される樹液を用いる在来の漆工芸が存在する。タイおよびビルマの漆工芸は、*Rhus vernicifera*（ウルシ）から採取される漆を用いる日本や中国の漆工芸とは、いくつかの点で異なっている。例えば、日本や中国では漆器の素地として木を用いることが多いが、タイおよびミャンマーでは竹を編んだ素地（籃胎）が多く用いられている。また加飾技法においても、鉄筆で漆を塗った面に傷をつけ、そこに顔料等を埋め込む技法（日本では蒟醤とよばれる）が高度に発展してきた。タイおよびミャンマーの漆工芸がこうした特徴を備えている理由には、原料となる *Melanorrhoea usitata* の特性や、タイおよびミャンマーに固有の地理条件や生活文化の影響が考えられる。

チェンマイのナンターラーム寺にある作業場

先行研究には短期的な調査に基づく報告が多く、漆器を製造する際の細かい工程や、ビルマ漆や竹といった漆器の原料となる生態資源の生産および流通に関する十分な調査は行われてこなかった。長期的な臨地調査を行うことで、タイおよびミャンマーの漆工芸が、日本や韓国、中国などとは異なる独自の発展を遂げた理由を、資源の利用法や在来技術の伝播などの側面から明らかにすることが期待される。

これまでにタイで行った予備調査では、伝統的な漆利用に代わる化学塗料の利用や、ミャンマーから輸入された漆器の販売等が確認された。

バガンの工房

## フィールドスクールから得られた知見について

フィールドスクールでは、多様性に富むカメルーンの様々な側面に触れることができた。湿潤な熱帯雨林の中を歩き、バカ・ピグミーの人びとの村を訪ねた。また農耕民の人々のキャッサバ畑を見学した後、牧畜民の家族のキャンプを訪ねた。小さな王国の王様に拝謁する機会にも恵まれた。

カメルーン・フィールドスクールの様子

フィールドスクールの合間には、意外な発見がたくさんあった。例えばアフリカの物価の高さである。ちょっとした日用品が、東南アジアと比較すると非常に高い。流通している日用品には、中国から輸入されたものが多かった。一方、かつてフランス植民地であった経験からか、街のどこでも形の整って美味なフランスパンが売られていた。またキャッサバには色々な食べ方があって、アジアの人々が好みそうなモチモチした「クスクス」という料理などには驚かされた。

東南アジアでは、特に意識しなくても円滑に進んでいくコミュニケーションが、アフリカではうまくいかない事も知った。物を買う時には東南アジアのように、愛想笑いでは交渉が成立しない。またフランス語を母語としている人々の住む地域では、英語は通じないことがほとんどである。

日本人がアフリカで実務的な仕事を成功させるためには、現地の言葉を覚え積極的に用いる努力をするなど、信頼を得るための気配りが欠かせないと思われる。こうした事柄に関して、フィールドスクールを通じて具体的に理解する機会を得た。

**フィールドスクールで学んだことがどのように研究にいかせるか**

カメルーンの農村で見ることが出来た在来農法は、環境に対して適応的である事で、持続的に収穫を得ることに結びついていた。また在来の工芸品や、今なお残る王国や、熱帯林の中での生活といった様々な事象が観光資源化し、現金収入をもたらすことで現在の暮らしを支える一方で、伝統的な生活習慣を壊しかねないという二面性をあわせもっている事が分かった。こうした事例から、ある特定の地域で導入できる農業は、その土地の生態環境に沿って異なる事が分かる。そして在来の生活文化が、様々な形で経済発展の径路を規定している事が分かる。

またカメルーンでよく見かけた中古の日本車や、中国製の日用品、店先の輸入食品などの存在から、商品の流通にみられるグローバル化が、東南アジア同様、急速に進展している事を感じさせられた。

今回のフィールドスクールでの経験は、今後、自分が関わっている調査地域について考えるための重要な手掛かりとなるだろう。